場所　新潟県長岡市

面積　34.82ha

活動目的　１.雪国低山の植物生態系と里山の自然生態系の保護、２．高齢者をはじめとする市民参加の受皿、３．次代を担う子供達への自然教育・情操教育の場を提供、４．結果として、地域社会の活性化への貢献



サイト概要　本サイトは、長岡市西部の雲出地区の丘陵（標高200m以下）に広がり、二次林、棚田、雑木林といった雪国越後の里山をそのまま利用し、自然生態系を大切に山野草などを大切に保護する自然植物園である。

昭和60年に市民グループが長岡市からの用地の提供を受け、造成活動を開始してから、令和7年春で40年の節目を迎える。東京ドーム約７個半の面積には、春は雪割草・カタクリ・ミズバショウが観賞でき、夏にはホタルが飛び交うなど、全国から年間２万人以上の人々が来園している。また、植物園の間伐材を活かし、長岡市内小学校の木工図工授業や植物学習の場としても活用されている。

土地利用の変遷

本サイトの地域は、住民が生活するための里山であった。水のある谷間は田圃となり、平坦な場所は畑として、急な斜面は薪炭林や木材の供給地であり、植樹された杉林は、全体の約40%を占めている。その後、生活様態の変化に伴い里山は管理放棄され、荒地となっていた。昭和60年に、雪国の里山の自然を保全し、その豊かな自然生態系と美しい景観を次の世代に伝え残していくことに賛同した市民グループにより、造成活動が開始され現在に至っている。

サイト周辺の環境

県道長岡・西山線の北側に位置し、近くには国営越後丘陵公園があり、田園風景が広がるのどかな地域である。
本サイトは、工業専用地域の緑地帯ではあるが、平成8年に条例を制定し、開発行為の制限をかけて西陵の森とした。

アピールポイント

地球温暖化などの環境問題が危機的状況を迎え、持続的な社会の実現へ向けた市民参加と意識改革が課題となっている中、雪国植物園は、40年以上前から、高山植物や外来植物、園芸植物を一切いれずに、市民参加を大きな目標に掲げ、継続して行政と市民協働により造成した植物園である。当植物園が位置する新潟県長岡市は国内有数の豪雪地に位置する。積雪地に分布が偏在する植物を多く見ることができる。

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】

里山には存在していなかった高山植物や外来植物、園芸植物を植物園に一切入れず、里山本来の植生を維持している。本サイトには雑木林、スギ林、水田跡地などが含まれ、小川も流れ中央には田圃があり、水生生物や昆虫・野鳥が集まるとともに、その周辺には新潟県を北限とするブナ科の仲間で山地に自生している常緑高木やナラやブナなどの広葉樹が広がっており、里山の原風景を見ることができる。

【主な植生】

里山林の主な植生はスギ植林と落葉広葉樹二次林である。
草地の主な植生は、耕作放棄地由来の多年草群落である。
湿地の主な植生は、ため池の湿生群落である。

【確認された主な動植物など】

3月／オオミスミソウ、カタクリ　4月／シラネアオイ、ミズバショウ　6月／ノハナショウブ、ニッコウキスゲ
7月／ヤマユリ、クガイソウ　　8月／キツネノカミソリ、センニンソウ、ヤブラン
9月／ヒガンバナ、アケボノソウ、ホトトギス　10月／リンドウ、オクトリカブト
原木ザクラ群生／「ヤマザクラ」「オオヤマザクラ」「カスミザクラ」「エドヒガン」「オクチョウジザクラ」の５種類　約3,000本。ユキツバキ群生／3万株以上。
ヤマツツジ群生／「ヤマツツジ」「ホツツジ」「レンゲツツジ」「ユキグニミツバツツジ」が5万本。エゾアジサイ群生／1万株。環境省レッドリストあるいは新潟県レッドリストに掲載されている多数の希少種を含む、樹木179種類、山野草642種、シダ類51種、計872種類の植物が確認されている。

872種類の植物にひかれて、トンボ40種、蝶33種、ホタル3種、蛙7種、蛇6種、サワガニ、メダカ等多様な生きものが育まれ、その豊富な餌場・繁殖地として、83種の野鳥や狸、狐、兎、リス等の小動物の生息が確認できている。



写真の説明：雪割草（オオミスミソウ）　雪解けとともに咲く春一番の美しく華麗な花で、株ごとの花色の変化が多様である。手入れの行き届いた明るい林の中で群生する。



写真の説明：カタクリ　場所によっては花が地面を染めるほど群生する。発芽から開花まで8年以上を要する。

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

園内は雪割草、カタクリなど里山を代表する山野草の観察地である。えちご雪割草街道として、雪割草の群生地の保護・公開している「大崎雪割草の里」、「雪国植物園」、「国営越後丘陵公園」、「妙法寺」の４カ所を結び、毎年３月にスタンプラリーをはじめ、ＪＲ長岡駅からのタクシー観光やバスツアー、フラワートークショーなど、観光客誘致を推進している。

【主な植生】

主な植生は落葉広葉樹二次林である
・東北や北陸地方が産地であるオオミスミソウをはじめ、ユリ科のカタクリの群生がある二次林。

【確認された主な動植物など】

872種類の植物にひかれて、トンボ40種、蝶33種、ホタル3種、蛙7種、蛇6種、サワガニ、メダカ等多様な生きものが育まれ、その豊富な餌場・繁殖地として、83種の野鳥や狸、狐、兎、リス等の小動物の生息が確認できている。

申請区域全体で確認されている主な種は以下のとおりである。環境省レッドリストあるいは新潟県レッドリストに掲載されている希少種も確認されている。
植物：オオミスミソウ（Hepatica nobilis var. japonica f. magna）、
　　カタクリ（Erythronium japonicum）、
　　シラネアオイ（Glaucidium palmatum Siebold et Zucc）、
　　ノハナショウブ（Iris ensata var spontanea Iris）、
　　ニッコウキスゲ（Hemerocallis dumortieri var. esculenta）



写真の説明：春の山野草観察会風景



写真の説明：木遊館での小学生の体験学習

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

本サイトは、里山が放置され荒廃していた地域を、間伐や植林、草花の植栽により再生・整備した場である。小川が流れ、薄暗く陰湿な場所であったが、自然の恵みを活かして再整備したことにより、絶滅危惧種や希少野生動植物種の生息・生育地として適した環境となっている。

【確認された希少種】

雪国植物園で確認できる希少種（新潟県レッドリストあるいは環境省レッドリストに掲載された種）の植物として、以下のいずれかに該当する植物が計15種以上生育する。

①新潟県が北限の植物
②積雪地域に分布が偏る傾向があり新潟県を中心に周辺数県に分布が限定される植物
③秋の七草の希少種

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
〈活動目的〉 身近にある里山を一つでも市民共有の財産として次の世代に伝えていくこと。長岡には、大正時代の初めに60歳を超えた有志が集まり、「人生の終わりを全うするにあたり、己の財産を善用し、末を誤ることなかれ」と自然あふれる公園を造成したまちづくり「令終会」の事例がある。本地域の保全を通じて、この事例を増やしていきたい。 〈活動内容〉 申請区域を3つの価値に合わせて活動を行う。 ①里山保全ゾーン（下記②・③以外の雪国植物園の敷地全体） 里山の場として、適正な間伐や下草刈りを行い、里山ゆかりの植物を維持していく。 ②自然再生ゾーン（主に、以前田圃だった池の周辺） 里山だから存ずる希少種の保全活動と、再生に向けた取り組みを進めていく。 ③雑木林ゾーンは、植物園の奥地が、里山に隣接する雑木林となるよう、人為的な介入を行わない。（ゾーニング図面や活動計画については別添） 〈外来種への対応〉 外来種の侵入を防ぐことは難しいため、入ってきたものを駆除する。外来種は強いので、明らかに違う花は気づいた時点でボランティアからも協力いただき除去する。 〈実施体制、計画の点検・見直し〉 平成令終会が中心となって里山の保全と希少種の再生活動を行う。希少種については、市立科学博物館など専門家の助言を踏まえ、季節の写真をＨＰにアップしていくことで里山の状況を発信し、ＯＥＣＭの認定に合わせて3年に1回は関係者全員による植物園の現状把握を行う。	**【モニタリング対象】** 山野草を対象とする。 動物・昆虫等については、専門分野ではないため、確認できたものについて追加情報として記録する。 **【モニタリング場所】** ①里山保全ゾーン：前年の写真と比較して植生の保全状況を確認 ②自然再生ゾーン：前年の写真と比較して周辺箇所を探索し、再生状況を確認 ③雑木林ゾーン：人為的なものを排除する探索で状況を確認 **【モニタリング手法】** 毎年、四季折々の山野草が群生する時期に目視や写真撮影を基本に実施。 植物の住民台帳の作成を目指して、気象データとともに、植物の開花日などの記録をつけていくほか、動物については追加情報として収集する。 **【モニタリングの実施時期及び頻度】** 毎年、季節のモニタリングは、平成令終会が中心となって実施。山野草に詳しいボランティアなどを募り、市民参加型で、植物園に協力してくれる層を増やす。3年に1回、詳細な状況を専門家の知見を取り入れながらまとめることとする。 **【モニタリング実施体制】** 平成令終会の事務局とボランティアスタッフが中心となって実施。 調査結果を科学博物館の専門家が監修・助言を行う。 将来的に学術研究の一助となるよう検討していく。